

関西大学文化交渉学

ICIS NEWS LETTER

ニューズレター



東西学術研究所
経済・政治研究所
法学研究所

CONTENTS

- 広闊な視野、清新な精神
- 東アジア文化交渉学会
第13回国際シンポジウム開催報告
- 研究班活動報告
- 研究員の活動報告

広闊な視野、清新な精神——東西学術研究所創立70周年を迎えて

東西学術研究所は今年で創立70周年を迎えた。昭和26年(1951)、関西大学の付置研究所として誕生して以来、順調に発展して今日に至っているといつてよい。

そうした本研究所の発展を表わすメルクマールは多いが、まずは研究成果の蓄積が挙げられよう。学術誌『東西学術研究所紀要』は今年第54輯を刊行し、年々掲載論文を増やしている。ほかに各研究員の研究成果を集成した研究叢刊として65冊、訳注シリーズとして21冊、索引シリーズとして1冊、資料集刊として88冊、国際共同研究シリーズとして9冊を刊行し、膨大な成果が結実しているのである。さらに創立30周年、50周年、60周年に当たっては記念論文集の大冊を刊行している。

研究活動としては、研究例会(年10回程度)、特別講演会(年1回～2回)、および国際シンポジウムの開催(不定期)を行っている。さらに本研究所を母体として、2005年度に学術フロンティア推進事業が、2007年度にはグローバルCOEプログラムが採択され、2017年度には私立大学研究ブランディング事業も採択された。いずれも文部科学省の支援する大型プロジェクトである。

このように本研究所は関西大学における人文学研究を長くリードしてきたのであって、世界的にもその名が知られているのもゆえなしとしない。人文系でこのように積極的な研究活動を展開、発展し続けている大学付置研究所は他にあまり例を見ないと思われる。

さて、このような本研究所の歩みを振り返るとき、重要なのはやはり石濱純太郎の存在であろう。そもそも本研究所は、学術研究の推進を望んでいた本学理事長宮嶋綱男が当時文学部教授

だった石濱純太郎に委嘱して創設されたものであって、その規程に、本研究所は東西両洋文化の学術研究殊に比較研究を行ない世界文化の融合に貢献するを以てその目的とする。

と掲げられた。ここで重要なのは「東西両洋文化の学術研究殊に比較研究を行なう」という方針であり、そしてそれは「世界文化の融合」という理想に支えられていた。東西両洋の諸言語に通じた、いかにも石濱らしい言い方である。また「世界文化の融合」とは一見、性急で迂遠な感じだが、しかしここにあるのが、今ふうにいえばグローバルな共生の視点に支えられた理念であることを見落としてはなるまい。

平成30年(2018)はその石濱の没後50年に当たっており、記念の国際シンポジウム「東西学術研究と文化交渉」を開催し、翌年にはその論文集を研究叢刊として刊行した。その際、石濱の学問を調べるにつけ感じたのは、古今東西にわたるその視野の広さと、新たなテーマにたえず取り組んでいく進取の姿勢である。ここには「広闊な視野」とともに「清新な精神」があるといえよう。

70周年という節目にあたって、そのような創設者石濱の「広闊な視野」と「清新な精神」を改めて想起したいと考えるのである。

(東西学術研究所所長 吾妻 重二)



東アジア文化交渉学会 第13回国際シンポジウム開催報告

東アジア文化交渉学会 第13回国際シンポジウムの開催について

2021年5月8日（土）、9日（日）の両日、二松学舎大学文学部主催の下、「世界的危機のいま洪沢栄一を考える」を総合テーマに、下記の分科会テーマを中心に研究発表を行った。

- 1、中国古典・儒教思想の現状と課題
- 2、媒体としての漢字・詩文と東アジア政治外交
- 3、金融・経済・貿易における文化交渉
- 4、公衆衛生、伝染病、製薬と文化交渉
- 5、実業家の思想・行動
- 6、教育における文化交渉
- 7、芸術における文化交渉
- 8、社会福祉事業における文化交渉
- 9、地域文化と観光にみる文化交渉
- 10、その他東アジア文化交渉に関連する内容

新型コロナウイルス感染拡大の中、昨年に続き、2021年度の東アジア文化交渉学会国際学術大会もオンライン形式にて開催

せざるを得なかったが、分科会発表に先立って、東京大学名誉教授、洪沢栄一記念財団理事長、印刷博物館長、樺山紘一先生と北京師範大学教授董曉萍先生がそれぞれ「旧幕知性の水脈：本木昌造・西周・洪沢栄一」、「跨文化学的対象論：汪德邁（Léon Vandermeersch）の中国学と日本漢学」を題とする基調講演を行い、また翌日、ドイツアカデミー院士、科学史研究者の Alfons Labisch 教授が「COVID-19 in different cultures-East and West」を題とする基調講演を行った。300人を越す会員が全体大会を視聴し、また分科会に出席し、研究発表と討論に参加した。期待以上の盛会であった。

2022年度年次大会は、「パンデミックが国際交流に及ぼした影響の歴史的検討とコロナ越えへの展望を考える」という総合テーマで韓国啓明大学にて、開催することが決定した。会員たちが、笑顔で再会することを願ってやまない。

(外国語学部 沈 国威)

第13回 東アジア文化交渉学会に参加して

2021年5月8日、9日開催の第13回東アジア文化交渉学会に、私と若手研究者の辻秀平、松山哲士、唐楚輝の4名でパネル「戦中・戦後の日本近現代文学にみる東アジア文化交渉」を組んで参加、発表した。Zoom開催であったが、パネルは全36、200名を超える世界各国の発表者、洪沢栄一についての基調講演などがあり実に充実した大会であった。

私の発表テーマは、1955年の火野葦平北京視察記、辻氏は川端康成が紹介した「英霊の遺文」の諸相、松山氏は日韓海戦の疑似イベントを描いた筒井康隆「48億の妄想」、唐氏は中国残留孤児を描いた山崎豊子『大地の子』をとりあげた。本パネルでは、火野、川端、筒井、山崎4名の作家が、戦中・戦後の激

動の時代に、アジア諸問題をいかにとらえ、見聞し、どのような作品を描いたのかという問題提起を行い、4作家それぞれの、移動、見聞、摩擦、葛藤、アイロニーなど、文化交渉の諸相を考察し、全体討議を行った。日本、中国、韓国をとりまく、21世紀になっても未解決の歴史的課題や、高度経済成長後の大衆と消費の問題などが浮かび上がり、活発な議論が展開された。学際的、国際的な幅広い視点から、日本近現代文学がとらえられ、大いに刺激を受け有意義であった。

(文学部 増田 周子)



火野葦平所蔵写真
1955年5月1日「慶祝五一」の風景



研究班活動報告

言語交渉研究班

昨年度の本研究班の口頭発表としての活動は例会を2回開催しただけとなったが、個々の研究員による研究は、それぞれの論文発表に見られるとおり、着実に積み重ねられている。東西学術研究所の刊行物としては、資料集刊49『『造洋飯書』の研究 解題と影印』（内田慶市編著）及び『文化の翻訳としての聖像画の受容 ヨーロッパ-中国-長崎』（内田慶市編著）が出版された。

『造洋飯書』は、中国で最初に出版された中国語による西洋料理レシピ集であり、宣教師によってもたらされた文化の一つである西洋料理の伝播と受容の研究に欠かせない資料である。西洋の聖像画は、中国、長崎における受容の過程で中国の聖像、日



「受胎告知」
『中国公教美術 Art sacra Pekinensis』
(1951, Wien)より

本の聖像として描かれ、そこに描かれた様々な聖母は文化がいかにかに翻訳されたかを雄弁に物語っている。

最終年度となる今年度は、東西学術研究所創立70周年にあたる年であり、秋に開催が予定されている記念シンポジウムでは全研究班による研究発表が行われる。言語交渉研究班では、その前日に「東西言語交渉の諸相（仮）」というテーマで研究例会を開催し、独自に創立70周年記念シンポジウムを盛り上げたいと考えており、準備を進めているところである。

(主幹 奥村 佳代子)



国際シンポジウム
「第七届东亚基督教文献与文学世界的佛教世界以及东南亚佛教与宗教」(於韩国东国大学校)ポスター

東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班

「東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班」においては、思想から文学、芸術にいたるまで幅広い分野をカバーし、東アジアにおける文化の交流、伝播、衝突などの文化交渉の事象を研究することを目的としている。



大石橋の薬王殿

新型コロナウイルスの影響を受けて、対面による研究例会などが開催しにくい事態に陥っているが、オンラインを活用することにより克服しつつある。2020年1月には、第6回研究例会「道教・民間信仰の変容と展開」、第7回研究例会「羅振玉の学術と芸術への新しいアプローチ」をオンラインにて開催し、多くの参加者を得て活発な討論を行うことができた。2021年5月には、二松学舎大学の主催により、東アジア文化交渉学会がオンラインにて開催された。当班からも多数の研究員が参加し、発表や司会を行った。

2021年度は最終年度でもあり、いくつかの研究例会を予定している。オンラインにて開催することになると考えられる。新型コロナウイルスの影響により、海外の現地調査が難しい状況であるが、なるべく国内の調査などに振り向けて実行したい。

(主幹 二階堂 善弘)

ユーラシア歴史文化研究班

本研究班は、ユーラシアの多様な歴史と文化を具体的に復元し、そこから新しいユーラシア史像を模索していこうとするものである。最終年度は、8世紀から9世紀にかけて、東ユーラシアに君臨し、唐、チベット帝国とともに三国鼎立時代を築きあげたウイグル帝国を通じて、このテーマに迫る予定である。



ウイグル帝国の都市オールドウ＝バリクに残るカラバルガスン碑文

ウイグル帝国については、漢籍史料に記録が残る他、モンゴル現地にウイグル時代の碑文が残り、また近年ではウイグル時代の地方都市の遺跡の考古学的調査が進められつつある。本研究班内外からこのテーマに関する研究者を集め、最新の



カラバルガスン遺跡(ウイグル帝国のオールドウ＝バリク)

研究成果を発表し、相互の議論を通じて、ウイグル帝国史像を浮かび上がらせていく計画である。

(主幹 森部 豊)

研究員の活動報告

コロナ禍における研究活動について

春学期は慣れない遠隔授業に追われ、秋学期は語学の授業を含め常時マスクをつけての対面授業、時に対面に並行してZoom使用のハイブリッド型の授業を行う必要もあり図らずもLMSやZoomの取り扱いに習熟することとなった。世界中で移動を制限され、日本国内の出張も認められない状況で、各種学会及び例会はほぼZoomでの開催であった。コロナ禍を機にコロナ終息後も研究活動は多種多様な方法、形態が継続されていくだろう。

移動に制限はあったが、その分学内及び近隣での落ち着いた研究活動ができた。一昨年から継続して調査を続けてきた大阪大学総合図書館では石濱文庫に所蔵される書簡およびノート類の業者撮影を順調に行えた。また、本学内藤文庫所蔵の書簡未撮影分および内藤史学に関する史料の撮影も進み、デジタル資料公開への基礎的作業を積み重ねてきたと言える。これらの活動の成果は本学の研究拠点形成支援経費を頂戴できたこととメンバーの馳まざる努力の賜物である。私自身は中国語口語の歴史的研究をテーマにしているが、史料があってこそその研究であ

り、そのための基礎作業は研究の是非を左右する重要な意味を持つ。時宜に叶った有意義な活動に大きな追い風を得たことを心からありがたく思う。コロナ禍は、腰を落着けて基礎作業を行うための貴重な時間を得ることになった塞翁が馬であるかもしれない。

(外国語学部 玄 幸子)



退職後の研究活動—人生未だ旅の途中

退職後3か月が過ぎたが、まだ実感としてはさほどない。大学側の好意により研究室を使用させていただいているし、大学院の授業も持たせていただいているので、ほぼ毎日大学には通っている。研究会や読書会、国際シンポジウム等も、コロナ禍によって以前よりもむしろ活発に参加できるようにすらなっている。新型コロナウイルスは地球規模で人類に未曾有の試練を与え続けているが、一方でオンラインによる授業や研究活動という新たな取り組みが積極的に行われようになってきたことは、コロナによる大きな成果であるとも言える。物事は考え方であり、人生は糾える縄のごとしとはよく言ったものである。しかしながら、ZOOMでは人の吐く息を肌で感じることは出来ず、

改めて人と人の心の通ったコミュニケーションの必要性を強く感じざるを得ないことも事実である。

それにしても、関西大学での31年間は自分にとっては教師・研究者冥利に尽きるというものである。素晴らしい研究環境、素晴らしい同僚、素晴らしい学生達に囲まれた31年間。とりわけ、東西学術研究所を中心とした研究活動、CSAC, CSACII, ICIS, KU-ORCASの約20年は私の研究人生で最も充実した期間であった。全ての人に感謝する。ただ、先はまだまだ見えては来ない。まさに、人生70にして未だ旅の途中である。これまで通りとは行かないまでも、研究活動に邁進していきたいと考えている。それしか取り柄がないのだから。



(客員研究員 内田 慶市)



■ 関西大学東西学術研究所資料集刊27-9

出版社：関西大学出版部

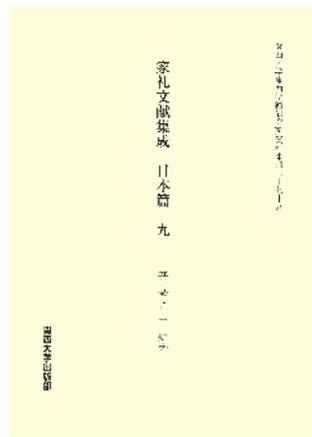
家礼文献集成 日本篇 九

吾妻 重二 編著

B5上製／322頁／定価 6,050円（本体価格 5,500円＋税）

ISBN 978-4-87354-736-7 C3014 (2021.3)

朱子『家礼』関連文献影印シリーズの第9冊。儒教葬祭儀礼をめぐる山崎闇斎、浅見綱斎の著作および講義を影印収載する。すなわち闇斎の『文会筆録』家礼部分、綱斎の『家礼師説』、『喪祭小記』（『通祭喪葬小記』および『浅見先生祠堂考』）、『家礼紀聞』、『喪祭略記』である。『家礼師説』（写本）には全文の翻刻を附した。解説つき。



■ 関西大学東西学術研究所資料集刊49

出版社：関西大学出版部

『造洋飯書』の研究

— 解題と影印 —

内田 慶市 編著

B5上製／396頁／定価 7,700円（本体価格 7,000円＋税）

ISBN 978-4-87354-733-6 C3039 (2021.3)

16世紀以降、イエズス会宣教師をその主な担い手とする「西学東漸」という一大潮流が巻き起こり、様々なものが西から東にもたらされた。本書は中国で最初に出版された西洋料理レシピ本である『造洋飯書』（1866）と、その後継である『西法食譜』（1889）を影印。解題として「近代中国における西洋料理の伝播と受容—『造洋飯書』を中心に」を付した。



■ 関西大学東西学術研究所研究叢刊64

出版社：関西大学出版部

Abraham Lincoln, Samuel Williams and East Asia

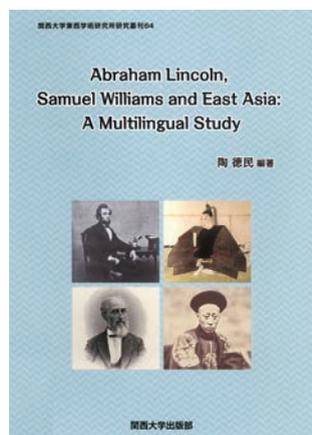
— A Multilingual Study —

陶 徳民 編著

B5／214頁／定価 6,380円（本体価格 5,800円＋税）

ISBN 978-4-87354-737-4 C3021 (2021.3)

将軍家茂に返信しジョセ彦を日本に派遣したリンカーン大統領と、ペリーの通訳官と北京駐在代理公使を務めた宣教師ウィリアムズ。開国以降の中国・日本に影響し続けている二人の米国人に関する論考。本書は明星大学東京リンカーンセンターなどに所蔵されている一次資料より執筆した論文7編、関連する写真170余点と目録で構成されている。



■ 関西大学東西学術研究所発行

出版社：遊文舎

文化の翻訳としての聖像画の変容

ヨーロッパ—中国—長崎

内田 慶市 編著

A5／315頁／定価 3,300円（本体価格 3,000円＋税）

ISBN 978-4-910433-20-2 C3018 (2021.2)

2019年6月に開催された国際ワークショップの論文集。「文化の翻訳としての聖像画の変容」「ド・ロ版画と関連資料」など7本の論文のほか、付録として2種類の影印も収録されている。



「関西大学 東西学術研究所創立70周年記念行事」について

2021年（令和3年）、東西学術研究所は創立70周年を迎えた。1951年（昭和26年）4月に関西大学の第一号の付置研究所として誕生して以来、70年の歴史を重ねてきた。

70周年を記念し、さまざまな企画を計画しています。

■ 記念シンポジウムの開催

東西学術研究所創立70周年記念シンポジウム

日 時：2021年10月30日（土）、31日（日）

場 所：関西大学千里山キャンパス以文館4階
セミナースペース【オンライン併用】

プログラム

1日目 2021年10月30日（土） 10：00～17：00

学長挨拶 前田 裕（学長）

開会挨拶 吾妻 重二（東西学術研究所長）

10：10～11：10

基調講演

陳 来（清華大学哲学系教授、清華大学国学研究院院長）
「清華大学の国学研究百年」（中国語、通訳つき）

11：15～12：15

基調講演

高宮 利行（慶應義塾大学名誉教授）
「漱石をめぐる江藤淳・大岡論争について」

12：15～13：15

昼休憩

13：15～14：15

言語交渉研究班

玄 幸子（研究員）、沈 国威（研究員）

14：15～15：15

都市遺産と宗教文化研究班

西本 昌弘（主幹研究員）、原田 正俊（研究員）

15：15～15：30

休憩

15：30～16：30

ユーラシア歴史文化研究班

藤田 高夫（研究員）、吉田 豊（客員研究員）

16：30～17：00

コメント

2日目 2021年10月31日（日） 10：00～16：30

10：00～11：00

西洋文学における信仰とフィクション研究班

ローベルト・ヴィットカンプ（研究員）

朝治 啓三（客員研究員）

11：00～12：00

東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班

二階堂善弘（主幹研究員）、陶 徳民（研究員）

12：00～13：00

休憩

13：00～14：00

身体論研究班

小室 弘毅（研究員）、岡村 心平（客員研究員）

14：00～15：00

風景表象研究班

野間 晴雄（主幹研究員）

蜷川 順子（客員研究員）

15：00～15：15

休憩

15：15～16：15

日本語文化化学研究班

村田右富実（主幹研究員）

関 肇（研究員）



■ 記念誌の刊行

70周年の歴史をまとめた記念誌を刊行いたします。特に60周年以降の研究所の研究活動報告や、研究班活動の記録、また歴代所長からのメッセージなど。

記念誌は、記念シンポジウムにあわせて刊行予定です。



■ 創立70周年記念論文集の刊行

東西学術研究所では10年ごとに記念論文集を発行しています。70周年の記念として、創立70周年記念論文集を刊行いたします。

こちらはこの10年間に東西学術研究所に研究員として所属された先生方からご寄稿いただき、2022年3月に刊行する予定です。

編 | 集 | 後 | 記

パンデミックの渦中にあっても、ICISをはじめ東西学術研究所の歩みが止まることはありません。調査活動には停滞が見られるものの、戦後の数十年間、現地調査を伴わない人文学研究は珍しくありませんでした。今、インターネットを用いた学術研究、会議、教育が爆発的に増え、「交流」のパラダイムシフトが世界各地で起こっています。そんな中で迎えた創立70周年は、東西学術研究所の研究活動における一つの転換期となるのかもしれません。

ICIS ニュースレター第7号をお届けします。奈須智子さんをはじめとする研究所事務グループの方々のご協力に感謝いたします。（編集者）

表紙上掲載写真：

【左】以文館外観

【右左】児島惟謙館外観 【右右】児島惟謙館エントランス表示板



発行：関西大学文化交渉学研究拠点

(Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL：06-6368-0653 FAX：06-6339-7721

E-mail：touzaiken@ml.kandai.jp

URL www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/

発行日：2021年（令和3年）8月